

## 里山を破壊する 時代錯誤の開発計画

新緑の木々の間をムクドリが飛び、心地よい小川のせせらぎが聞こえる。横浜市栄区上郷町



瀬上沢沿いの散策路 (写真: Moo)

は、通称「瀬上の森」と呼ばれる。横浜7大緑地の一つである円海山のふもとに位置する。オオタカ、コサギ、カワセミなどの野鳥や、4000種を超える昆虫類が生息。湧水もあり、夏には

ホタルも飛び交うなど豊かな生態系が残る里山だ。

この瀬上沢に大規模開発計画が持ち上がったのは2006年。土地を所有している東急建設は、山を削り住宅地を建設し、土砂で谷を埋め立て大型商業施設を建てようと計画。瀬上沢地区の市街化調整区域約33ヘクタールのうち21ヘクタール、横浜スタジアム8個分が開発対象となった。

計画が実施されれば50万本相当の樹木が伐採され、多様な生物種の生息する豊かな環境が破壊される。

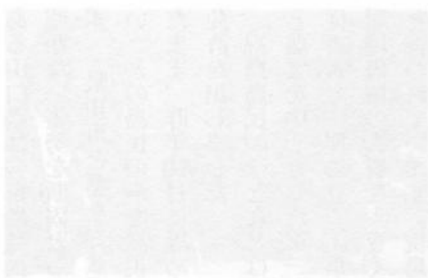
160万年前の化学合成貝化石の露頭、古代の製鉄遺跡や横穴墓群、江戸期の横堰、戦争中に造られた砲台跡など、歴史的遺跡も破壊されることになる。大型商業施設による道路渋滞などの問題も指摘された。

### 9万人の市民の思いが 行政を変えた

「これ以上、自然が破壊されるのを見るのは耐えられませんでした」。そう語るのは「上郷開発から緑地を守る署名の会」代表の高村鈴子さん。高村さんは子どもの頃から親しんだ身近な自然が失われていくことに危機感を覚えた。

## 子どもたちに 里山を残したい

瀬上沢巨大開発を止めた住民たち



文=温井立央

上郷町 [神奈川県]

横浜市栄区上郷町では、里山の開発計画に反対する署名に9万人の市民が賛同し、開発計画をストップさせた。運動の中心を担った「上郷開発から緑地を守る署名の会」「ホタルのふるさと瀬上沢基金」の人々と共に現地を訪れた。

< 月刊誌 : Actio 2009年7月号より >



開発計画の発表後、2007年に「署名の会」を発足。以後、会ではシンポジウムをおこない、市長に陳情書を提出し、党派を問わず市議と面談するなど精力的に活動を行った。次第に地元新聞にも取りあげられ、瀬上沢の問題を知る人は増えていった。そして2007年12月までの半年間で9万人の反対署名を集め、横浜市に提出。その結果、2008年9月、横浜市は東急建設の計画案を正式に却下し、開発計画は白紙に戻った。市民の運動が開発を押しとどめた大きな成果だった。

## 企業と行政が一体となって推進

市は「樹林地の大幅な改変や大規模商業施設の立地は市の方針にそぐわない」として計画を認めなかった。しかし東急建設は計画を断念していない。そもそも「瀬上沢」地域の開発計画はこれが2度目。1992年も同社は計画を立てたが、この時は開発地域が「市街化調整区域」にあたるため許可が下りなかった。

ところが2003年に「都市計画提案制度」が施行された。東急建設はこの制度を利用し、市街化調整区域を市街化区域へ

編入する計画を市に提案。市はそれを受理し、業者と一体となつて開発を押し進めようとしてきた。

地元市民団体が懸念しているのは、舞岡上郷線をはさんで北側の谷戸（やと）三方が閉じた谷間の地形）。一帯の樹林地と農地は、駅にも近いため再度開

## 身近な自然を次の世代に残したい

開発を押しとどめた「署名の会」では、行政に頼るだけでなく、市民自らがお金を集め瀬上沢の保全活動しようと考えた。こうして「署名の会」有志が集まり、2008年10月に「特定非営利活動法人ホタルのふるさと瀬上沢基金」を成立。今は

開発計画が持ち上がる可能性がある。

農地といつてもほとんどは耕作放棄地。藪となった田んぼ跡にはゴミの不法投棄も目立つ。買収した東急建設が20年に渡って放置した結果、荒廃が進んでいる。

定期的に不法投棄のゴミを片付けながら、瀬上沢保全に向けたトラスト運動を進めている。「瀬上沢基金」理事長の角田東一さんは次のように語る。

「60年前、私が子どもの頃は山と田んぼしかなくつまらないと感じた。学校を卒業してから川崎で暮らし、地元に戻ったのは昭和50年頃。その時はじめて『こんなに良いところは他にない』と気が付いたんです。定年後、地元でゆっくりしようと思つたら瀬上沢の問題が。昔のまま残っている谷戸は瀬上沢だけ。私は若い頃に自然の豊かさを経験しているから、大気汚染や温暖化の問題、生物多様性の大切さが実感できる。だからこそ子どもや孫にちゃんと自然を残したいと思つたんです」

横浜市福祉のまちづくり推進会議委員で「瀬上沢基金」の副理事長である藤田みちるさんは、「あなたも開発した場所に住ん



ルリビタキの若鳥 (写真: Moo)

でいるのに何故反対するのか」と周囲から言われた。

「確かに私たちは丘陵地を開発した場所に住んでいます。しかし今や自然は残り少なくなくなり、保存することさえ困難です。だからこそ何としてでもこれ以上の開発を止めたかった。私にとつては子育てをし、子どもたちも遊んだ場所。瀬上沢は私や子どもたちにとって自然を満喫させてくれる『ふるさと』です。コンクリートで固めるだけが都市ではない。都市の中に農業もあり、自然もあるのが本当の姿じゃないですか」

将来の世代に自然を残したい。暮らしやすい街をどのように作っていくのか。そんな住民の想いが里山の保全に向けた大きな動きにつながったのだ。



不法投棄が目立つ農地跡 (写真: 温井)